

私はこう
考える

幼児期は
「準備期」?

「たいしたもんやなあ」

柳瀬洋美
(大学教員)

幼きころの私は、われながら実に想像力豊かな子どもだったと思う。絵本に影響を受け、地球の裏側に行こうと庭に穴を掘り、硬い地盤に阻まれ無念の撤退をしたり、「石焼き芋」は特別な石を焼くと芋になるのだと思い込み、たき火のたびにせつせと石を仕込んだりと、日々世界の不思議に挑戦し、はたから見たら笑える幼児期を、全身全霊で満喫していた。そんな私の途方もない思い込みや壮大な実験計画を、母は、ばかにすることも笑い飛ばすこともなく、いつも耳を傾け聴いてくれた。例えば、「ブラジルに行くー」と穴を掘っていると、母の故郷の伊勢特有のゆつたりとしたなまり口調で「あんたもご苦労さ

んやなあ」と私の労をねぎらい、焼き芋にならない黒焦げの石を見つめ落胆する私を「残念やったなあ」と慰めてくれた。失敗しても成功しても、変わりなく受けとめてくれたのである。

もちろん、ここで大人の正しい知識を伝授するというかわりもあつたかもしれない。だが、母の場合、基本的には何も言わないので、私は自分でこの大いなる謎に挑むことになる。図書館に行き、幼児にとつては難しい字が詰まった本を想像力で補いながら読み、調べた。例えば穴掘りの件では、地球の内部構造を知り、庭の硬い地盤をマントルだと思い込み、そのまま掘り進めるとマグマが噴き出すので

掘るのをやめて正解だった、という結論に達した。そうして新しく得た知識を報告すると、母はいつも「たいしたもんやなあ」と感心してくれた。幼い私にとって、それが何よりうれしかったのである。

今日の日本では、就学前教育は重要で、少しでも早期に始めたほうがよいという風潮が強い。中には幼児期では遅く、乳児や胎児から始めたほうがよいといった超早期教育を提唱する者もいる。超早期教育は極端にしても、実際これまでにはなかったような多彩な習い事や幼児教室がちまたにあふれている。子ども自身の主体性が尊重されるのであれば、こうした場を利用して子どもたちが生き生きと活動を楽しむことは悪いことではなく、また、困難な課題を乗り越えた時に得られる達成感は貴重だとも思う。だが、こうした就学前教育の早期化の背景にあるのは、子どもたちの才能や可能性を少しでも早く開花させ、育てたいという親の願いだけではない。

ベネッセ世代育成研究所が実施した調査(「第一

回 幼児期から小学一年生の家庭教育調査報告書」二〇一三)によると、小学校入学に向けて気がかりなこととして、年中児の親は「友達とのかかわり」を、年長児の親は「勉強と学習」を多く挙げている。わが子が小学校での生活や学習についていけるのか、不安を抱えている親が多いのである。

実際に子育て相談の場において、わが子の意思を尊重したいと思うが、周囲の子どもたちと同じ習い事をしないと取り残されるのではないか、と強い不安を訴える親が少なくない。わが子が将来苦労しないようにという切なる親心がそこにある。

そのため、子どもたちの将来にとって「有意義であるかどうか」が、親たちの幼児期の教育に関する重要な判断基準の一つとなっている。その結果、おのずと「できるようになる」という成果が期待され、集団であれば、他児との比較のもとでその成果は評価されがちである。一方、子どもたちは親に認められることが何よりうれしい。親の笑った顔が見たくて頑張ってしまう。親も子ども一生懸命である。

だが、果たしてそれでよいのだろうか。これでは、親は理解者としてではなく、評価者としてわが子とかわかることになってしまう。子どもたちにとって本当に必要なのは、成果に左右されることなく、ありのままの自分を認めてくれる大人たちの温かなまなざしであり、さまざまな思いを分かち合い、共に育ち合っていく仲間たちの存在なのではないだろうか。

今はすっかり大きくなった息子が保育園の年中児のころ、担任の先生が笑いながらこんな話をしてくれた。息子がカタツムリの抜け殻を園庭に埋め、仲間たちと厳かに祈りをささげ、「一時間ぐらいかな」と話していたというのだ。何が一時間なのか尋ねたところ、一時間後にカタツムリが生まれ変わって出てくると答えたそうだ。おそらく、過去にカタツムリの殻を埋めた所に別のカタツムリがいたのを見て、復活したと思っ込んだのだろうが、それが神聖な儀式にまで発展するとは、子どもの想像力と創造力とは実に「たいしたもの」である。後で本人にカタツ

ムリ復活について尋ねると、彼は胸を張って答えた。「そうだよ。柄がはつきりしているのは一時間くらいで、白いの（古くて色が抜けたもの）は一晩くらいかな」。その得意げな表情が忘れられない。

私たち大人は目的地向かう時、より早く効率的に到達することを考え、そのための計画を立て、準備しがちである。だが、子どもたちは違う。道端の花や石ころに心奪われ、ふとした物音に耳を澄ませ、目的地に向かう道中そのものを楽しむ。道は、目的地向かうためだけに存在するのではないのである。

確かに、幼児期の豊かな経験の積み重ねの上に学童期はある。しかし、だからといって幼児期は小学校の入学準備のためだけにあるのではない。親も子どもも頑張り過ぎないで、幼児期の今、この瞬間のきらめきを共に楽しむことも、どうか忘れないでほしい。



▲今、この瞬間のきらめきを一仲間と共に